



Title	フッサールの科学論 : 『危機』書の再考
Author(s)	山口, 弘多郎
Citation	メタフュシカ. 2012, 43, p. 105-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/26494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フッサールの科学論 —『危機』書の再考—

山口弘多郎

はじめに

現代科学論は、科学と科学者を区別して議論を展開する。科学という営みを研究することと科学者集団を研究することは、お互い内的な連関を持つけれども、科学哲学と科学社会学といった仕方などで分けられているのである。パラダイム論のような科学と科学者を相関的に捉える議論などを考慮すれば、この科学論的差異とも言える区別が重要なものとなっていることがわかる¹。そしてこの区別が重要なものであるなら、この差異を科学論の評価軸にできるだろう。

本論文は、エトムント・フッサールが晩年に発表した論文『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』（『危機』書と略記）を、この評価軸に基づいて再考するものである。そうすることで『危機』書の現代的な意義を示したい。

そのために以下の手順で議論を進める。まず『危機』書におけるフッサールの科学批判を検討する(1)。次に、『危機』書から、科学と科学者を区別する観点を取り出し(2)、その観点からフッサールの科学者論を見ていく(3)。最後に科学論的差異の重要性を確認し、それに基づいて『危機』書の再評価を行い、その現代的意義を考察する（おわりに）。

1. 自然科学批判

最初に『危機』書の基本的なことについて確認しておく。『危機』書は、1936年、アルトゥール・リーベルト主宰の雑誌『フィロソフィア』に掲載された論文である。フィンクの伝える計画では全5部となる予定であったが、第3部までしか書かれず、『フィロソフィア』に掲載されたのは第2部までだった。現在、第3部はフッサール全集第6巻に収録されている。第1部で学問の危機が論じられ、第2部で、その根源的な動機を解明し同時に超越論的現象学の必然性を示すために、近代哲学が歴史的に考察されている。

¹ 成定薫「科学史における三十年代と七十年代 エクスターナル・アプローチの展開」（村上陽一郎編『知の革命史Ⅰ 科学史の哲学』1980、所収）

『危機』書は、フッサールが前年の35年に行った講演に基づいている。彼は、35年5月7日と10日、ウィーン文化連盟の依頼をうけて「ヨーロッパの人間性の危機における哲学」という講演を行い、また同年11月に「人間悟性研究のためのプラハ哲学サークル」から招待されて、プラハのドイツ系大学とチェコ系大学で、「ヨーロッパの学問の危機における心理学」という講演を行っている。『危機』書とは、この二つの講演内容、特に後者、を敷衍して書かれたものである。

本章では、この『危機』書の第2部、第9節の「ガリレイによる自然の数学化」というテキストを中心に、フッサールの自然科学批判を見ていきたい。そのために、彼が自然科学という言葉で何を指していたのか、を確認する必要がある。『危機』書が書かれた1930年代と現代とでは、自然科学という言葉の幅が異なるからである。

19世紀末から20世紀はじめにかけて、物理学内で大きな変革があった。1900年にプランクが量子仮説を提唱し、そこから1925年から26年にかけてハイゼンベルクとシュレーディンガーが量子力学という新しい理論を確立した。またアインシュタインが、1905年に特殊相対性理論を、1919年に一般相対性理論を提唱し、相対論という新しい理論を確立している。これらの現代物理学は、17世紀の科学革命以来の物理学である古典物理学と区別されている。

しかしフッサールは、現代物理学と古典物理学を区別しない。「物理学がニュートンによって代表されようが、あるいはプランクやアインシュタインや、その他未来の何者によって代表されようが、物理学はいぜんとして精密科学であったし、またそうありつづけるであろう」(VI, 2)²。彼は、現代物理学の立場から古典物理学の方法を問題にするわけでも、古典物理学の立場から現代物理学の方法を問題にするわけでもない。彼が、現代物理学と古典物理学を区別しない理由は、両者とも数学を用いるところにある。より正確に表現すれば、両者とも公式の発見が主な仕事であるという点にある。

それに関するテキストが、第9節「ガリレイによる自然の数学化」である。この節では、測定術という技術から公式の発見に至るまでの自然科学の発生論が論じられている。これから、その内容を詳細に見ていこう。

フッサールは、幾何学は測定術へと遡ることができると述べる。「基本的形態を基礎的な規定手段として、いくつかの理念的形態を、そして最終的にはすべての理念的形態を操作的に規定するという幾何学的方法は、すでに学以前の直観的な周囲世界 (Umwelt) において、最初はまったく幼稚に、次いで技術的に行われる、測量や測定という規定方法へ遡られる」(VI, 24) というのも、次のような過程を考えているからである。

測定術の仕事は、「まず(像的類似性のうちの)『形』、次いでその大きさや大きさの関係、さらに、よく知られ、不動のものとして前提されている場所や方向と関係させて距離や角度を測ることによって行う位置の規定、これらに概念を与える」(VI, 25) ことである。昔の航海において、北極星が不動のものとして前提され、その角度などを六分儀で測ることによって、海上の

² フッサール全集 (Husserliana) からの引用は慣例にしたがい、本文中括弧内に巻数をローマ数字で、またページ数をアラビア数字で表記した。

位置が特定されていたことを思い浮かべると、この引用は理解できるだろう。

航海術に限ることではないが、測定術は進歩する。土地の測量なら、歩幅や縄で測るところから、器具を用いた測量へと進歩し、測量の精度があがる。さらに測量方法が新しくなれば、再度測量され、より精密な規定が行われるようになる。これは、測定術の進歩のたびに可能なことである。

フッサールは次のように述べている。「この完全化という実践から出発して、『いつも繰り返し(immer wieder)』という仕方、考えうるかぎりの完全化の地平へと自由に進む中で、いたるところに極限形態(Limes-Gestalt)が予示され、決して到達されることのない不変の極(Pol)としてのそれへと向かって、そのつどの完全化の系列が伸びてゆく」(VI, 23)。ここでは測定術の進歩が「完全化」と表されている。新しい測定術で、同じ物を「繰り返し繰り返し」測定することで、その同じ物の「極限形態」が示されてくる。土地の測量を再度例に考えるなら、ここで言われる「極限形態」は、「面」や「四角形」などを指すだろう。

測量を行っているとき、測量士の関心は目の前の土地に向けられている。その関心が、具体的な土地ではなく、極限形態に向けられたとき、幾何学が誕生する。

以上のようにフッサールは幾何学の発生を考えていた。ここから公式の発見へ至るには、さらに二つの過程を経る。それは「幾何学の算術化」と「内容的充実(Fülle)の間接的数学化」である。

「幾何学の算術化」は、幾何学的な作業が計算によって行われるようになったことを指す。「測定では測定値が与えられる、そして測定量の関数的な依存関係についての一般の命題においては、規定された数ではなく、数一般が与えられ、しかも関数的な依存関係の法則が表現されている一般的な命題において、表される」(VI, 43)。この引用が示すように、幾何学的な計算には、測定値を用いた計算だけではなく、数一般を用いた代数的な計算も含まれている。

測定値を用いた計算は、世界に関する新しい認識をもたらす。つまり「人は、そのつど与えられ測定される形態的な出来事から、規定されていない上に決して直接測ることができない出来事も、異論の余地のない必然性をもって『計算』することができる」(VI, 31)。この場合、ピラミッドの高さ、海岸から海上の船までの距離、月や惑星といった天体の距離の計算などがあげられるだろう。これは、測定値を用いた計算だけでは不可能なことである。測定値という特定の数を代数にし、形態に関する法則を代数的な命題で表現することによって、はじめて可能になることである。

「測定術の幾何学化」から「幾何学の算術化」を経て、事物の形態は数学化された。フッサールは、これを「直接的数学化」と呼ぶ。しかし自然科学の公式は、形態の直接的数学化からは生じない。「内容的充実の間接的数学化」から生じるのである。

フッサールは、ロックの一次性質と二次性質のように、事物を形態と感性的性質に分けて考えている。感性的性質とは、この場合、色彩や手触り、匂い、温かさ、重さなどを指す。この感性的性質が、形態と関わるとき、形態の内容的充実と言われる。

形態と感性的性質は類比物ではない。形態は、幾何学の場合のように、精密な測定が可能であ

るのに対し、感性的性質はそうではないのだ。したがって、感性的性質の直接的数学化は成立しない。そこで間接的数学化が目指される。これは、「直観的物体において経験される特殊な感性的性質（内容的充実）が、本質的に属している形態とまったく特別な仕方、密接な規則的関係を持つ」（VI, 33）という意味において可能になる。例えば、弦の長さや音の高低、水銀柱の高さと温度の高さ、物体間の距離や速度と音や光の波などがあげられる。この規則的な関係が、代数的な算術と結びつくことで、公式が成立する。例えば、物体間の距離や速度と音や光の波は、ドップラー効果として公式が発見されている。

「人は、一度このような公式を持つと、それによって、具体的現実的な生の直観的な世界——数学的なものはそこではただの特殊な実践にすぎない——において、経験的确实さで期待されるものを、実践的に望ましい仕方、あらかじめ予見することができるようになる」（VI, 43）。このことは、アインシュタインの光の湾曲に関わる理論的な予見が、1919年のエディントンによる日食観測によって確認されたこと、または、アダムスとルヴェリエが天王星の外側に未知の惑星を予見し、それが実際に海王星の発見によって確認されたこと、などを考えると理解できるだろう。

このようにフッサールは、自然を数学化する公式の発見が、自然科学の誕生となったという発生論を展開した。それでは、彼は、このような自然科学観から、どのように自然科学を批判したのか。

フッサールがこの批判を行った背景には、自然科学の成功がある。「19世紀後半、近代人の世界観は、実証科学によって規定され、また実証科学に負う『繁栄』によって眩惑されていた」（VI, 3）。彼は自然科学の大成を詳細に分析したわけではないが、公式によって可能となった予見的・中性の高さが、自然科学の大成につながったと考えられるだろう。このことは、心理学の中から、自然科学の方法を模範としたヴェントの実験心理学が誕生したことなどが示している。

「われわれすべてが育てられてきた数千年の伝統があるからといって、客観的科学という伝統的な概念を、学一般の概念と取り違えてはならない」（VI, 127）。実験心理学のように、本来精密ではなかった分野から、自然科学の方法を模範とする学が登場し、それによって学問一般が客観科学と同一視されるようになる。彼は、そのような事態に対して、上のように批判するのである。

そのような批判の中で、とりわけフッサールが強調したことは、以下のことであった。「幾何学的な、自然科学的な数学化では、我々は、無限に開いた可能な経験にある生活世界——われわれの具体的な世界生活（Weltleben）の中でたえず現実的なものとして与えられている世界——に、ぴったりと合った理念の衣（wohlpassendes Ideenkleid）をあわせる」（VI, 51）。「この理念の衣は、一つの方法にすぎないものを真の存在だとわれわれに思い込ませる」（VI, 52）。

自然の数学化は、直接的数学化であろうと、間接的数学化であろうと、事物の形態や感性的性質を数値や代数へと置き換え、両者の関係を公式という数式に置き換える。このような公式の体系が、ここでは「理念の衣」と言われている。フッサール自身はこの比喩を強調しているが、ここではむしろ「ぴったり合った」という形容詞のほうが重要だろう。この「理念の衣」が「生活世界」と「ぴったり合う」からこそ、数学化された自然が、真の自然と思込まれるからだ。数

学的な自然を真の自然と捉える見方は、ガリレオ・ガリレイの「哲学は、眼のまえにたえず開かれているこの最も巨大な書の中に、書かれているのです。[中略] その書は数学の言語で書かれており、その文字は三角形、円その他の幾何学図形であって、これらの手段がなければ、人間の力では、そのことばを理解できないのです³⁾」といった言葉が代表しているような見方のことである。

フッサールにとって、数学化された自然は「生活世界の代理を^レしている」(VI, 52) にすぎない。というのも、生活世界で「われわれは、幾何学的に理念的なもの、様々な形態をもつ幾何学的空間や数学的時間を決して見出さない」(VI, 50) からである。しかし、「客観的なものは、まさにそれ自体としては、経験不可能なものであるのに、自然科学者自身は、経験可能であるかのようにみなしている」(VI, 131)。人は、作図された点やパソコンの画面を見ているのであって、幅のない点や線を見ているわけではない。

そして「生活世界が、その相対性とそのつと性 (Jeweiligkeit) の変化において一つの現実的に存在する世界として妥当している、唯一の真の世界である」(XXIX, 140)。ただしここでの「真 (whar)」の意味に注意しなければならない。「真の存在とは、ドクサのうちにあっては問われることなく『自明的』とされているもの」(VI, 11) である。

それでは、フッサールにとって真の世界であるところの生活世界とは、どのような世界なのか。その規定は、前出の引用文にあった。それは「われわれの具体的な世界生活の中でたえず現実的なものとして与えられている世界」(VI, 51) である。つまり生活世界とは、世界生活が営まれるところの世界であり、現に存在している世界である。またこの世界で出会われるものは、前述のように、点や直線といった理念的なものではなく、石や動物など意味をもった具体的な事物である。

ではこの生活世界は、自然科学とどのような関係を持つのか。「理念の衣」をかぶせることは、自然科学が生活世界に対して行っていることであるが、その反対に、生活世界が自然科学に対してもつ意味とは何なのか。

まずこの世界は、学問の主題であると言うことができる。「自然研究者を含む、この世界に^レ生きている人間は、あらゆる実践的な問いや理論的な問いを、この世界に対してのみ立てられる」(VI, 50)。ニュートンやアインシュタインが向けた理論的な考察も、この生活世界に向けられたものであり、だからこそ、公式の発見は「理念の衣」をかぶせる行為となったのである。彼らの理論的考察が、この世界についての理論考察ではなかったならば、理論的世界と生活世界はまったく異なるものになり、「ぴったり合う」こともなかった。

またこの世界は、学問の土台であると言うこともできる。「もろもろの学は、生活世界から、自己のそのつどの目的にとってそのつど必要なものをとりだして利用しながら、生活世界の自明性の上に立てられている」(VI, 128)。このことに関しては、フッサールも例を出している。一つは、アインシュタインによるマイケルソンの実験の利用⁴⁾であり、もう一つは、計量器や目盛

³⁾ ガリレオ著、山田慶兒、谷泰訳『偽金鑑識官』中央公論社、2009年、57頁

⁴⁾ アインシュタインは、特殊相対性理論を構築する際、マイケルソンとモーリーの実験に大きな影響をうけた、と言われているが、現在のアインシュタイン研究には、彼はその実験にさほど影響を受けなかったとする研究もある。板垣良一「アインシュタインとマイケルソンの実験 京都帝国大学演説をめぐって」『科学史研究』38, 173-177頁 (日本科学史学会, 1999)

の知覚である。アインシュタインが、自分の研究に必要なものとして、蓄積された先行研究の中からマイケルソンの実験を利用するとき、彼は、マイケルソン自身や論文といったものに対して理論的關係を向けず、現実に存在するものとして自明視している。計量器や目盛も同じである。科学者は測定を行っているときに、自分が使っている計量器が本当に存在するのかと疑うことはしない。それゆえに学問は「生活世界の自明性の上に立てられている」(VI, 128)と言われるのである。

フッサールは生活世界という概念を用いて、以上のような自然科学批判を展開した。その要旨を端的に表すなら「生活世界の忘却」と言えるだろう。彼は、「生活世界」という概念を用いて、このことを明らかにしたのだ。クレスゲスのいうように、「生活世界」には、自然科学ひいては学問一般の状況を「診断」する役割があった⁵。

2. 科学と科学者の区別

前章でフッサールの自然科学批判を確認したので、本章では、彼のこのような議論から、科学と科学者を区別する観点を取り出したい。ここで彼が35年に行ったウィーン講演に戻る。先に確認したように、この講演とプラハ講演が敷衍されて、『危機』書となった。つまりこの講演には『危機』書で展開される議論の要点が含まれている。注目したいのは、次のような言葉である。

「自然研究者は、自分の主観的な思考の恒常的な基礎が生活周囲世界 (Lebensumwelt) にあること、この世界が自分の問いや思考方法が意味を持ちうる土台として、研究領野として絶えず前提されていることを、明らかにしようとしなさい」(VI, 343)。「この単なる主観的な直観的な周囲世界が学問的主題の中で忘れられることによって、研究する主観もまた忘れられ、学者も主題にされなくなる」(VI, 343)。

ここには生活世界の忘却が、同時に、そこで生きる主観の忘却でもあることが示されている。そして自然科学批判を介して生活世界を主題化したように、学者を主題化しようという意図を読み取ることができる。そこで、生活世界とその主観の關係について考えたい。そのために、まず「周囲世界」について見ていく。

上記の引用にある「生活周囲世界」という語が示すように、「生活世界」は、「周囲世界」と関連している。「生活世界」の概念史を追うと、一方でアヴェナリウスの「自然的世界概念」に遡ることができ、他方でこの「周囲世界」に遡ることができ。遺稿を除き、講義や公刊されたテキストでは、1910年に行われた講義「現象学の根本問題」において「自然的世界概念」が扱われ、1913年『哲学および現象学的研究年報』に掲載された「純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想」(以下『イデーニ I』と略記)において「周囲世界」が論じられている。

もともと「Umwelt」は、生物学者ヤーコプ・フォン・ユクスキユルが用いて有名になった語である。フッサール文庫に保存されているフッサール所蔵の本の中には、ユクスキユルの『動物

⁵ ウルリッヒ・クレスゲスは、『危機』書の議論で生活世界が果たした役目は「診断」と「治療」であると指摘した。(「フッサールの〈生活世界〉概念に含まれる二義性」新田義弘, 小川侃編『現象学の根本問題』晃洋書房, 1978, 所収)

の『環境世界と内的世界』が含まれている。この語を用いたマックス・シェーラーが、上記の年報の編集に関わっていたことを合わせて考えると、フッサールとユクスキュルの間に関連がある可能性は高い。しかしユクスキュルの「Umwelt」が主に「環境世界」「環境」「環世界」と訳されるのに対して、フッサールの「Umwelt」は「環境世界」等と訳される一方で、「周囲世界」とも訳される。その理由を念頭に置きながら『イデーⅠ』における議論を確認しよう。

その第2篇「現象学的基礎考察」内の第27節「自然的態度の世界：私と私の周囲世界」において、フッサールは、「表象したり、判断したり、思ったり、意志したりする、自然な生を送る人間」(III/I, 56)を、「一人称単数の視点」で語ることで、考察を始めようとする。この「自然な生を送る」姿勢のことを「自然的態度」という術語で表し、その態度で向き合う世界を「周囲世界」と表している。

周囲世界は、「私にとって、一つの単なる事象世界として現に存在しているのではなく、同じ直接性において、価値世界、財貨世界、実践的世界として、現に存在している」(III/I, 58)。その周囲世界の中で見出されるものは、事物であるなら、「『書物』をのせた『机』であったり、『コップ』や『花瓶』や『ピアノ』等といった実用品として現にそこにある」(III/I, 58)、また人であるなら「彼らは、私の『友だち』あるいは『敵』であったり、私の『部下』あるいは『上司』であったり『見知らぬ人』あるいは『親類』であったり等々、するわけである」(III/I, 58)。

ここで注目すべき点は、事物や人は価値や意味を持った存在であり、それが「私にとって」の価値や意味であるという点である。この周囲世界論は、一人称の視点つまり「私」の視点から展開されている。だから「私の周囲世界」という所有代名詞のついた表現が成立する。この所有代名詞の意味は、『イデーⅠ』の続巻であり、生前公刊されなかった『イデーⅡ』を見ると、より明確になる。特に、この巻の第3篇「精神的世界の構成」内の第50節の題「周囲世界の中心点としての人格」が、端的に、その意味を表している。この節では「私は人格として存在し（そして他のどの人格もそうであるが）、一つの周囲世界の主観として存在している。自我と周囲世界の両概念は不可分な相互関係にある」(IV, 185)と述べられている。したがって「Umwelt」が「周囲世界」と訳されるのは、中心である主観との相関性を表すためだったのである。

周囲世界は、自然的態度において「現に存在している」世界である。この点で、生活世界と類似性を持っていると言えるだろう。『危機』書では、自然的態度が「自然な世界生活の態度 (Einstellung des natürlichen Weltlebens)」(VI, 151)と表現されている。

周囲世界から生活世界を考察すれば、フッサールがウィーン講演において、生活世界の忘却と主観の忘却を、同時の出来事として扱った理由がわかる。ここで再度、生活世界の忘却の内実を確認することで、主観の忘却がどのようなものであるかを考えたい。

生活世界の忘却は、理念化された自然（世界）を真の自然（世界）であると思込むことであった。このことを『危機』書の補巻であるフッサール全集第29巻のテキストから詳細に見てみたい。そこで理念化は次のように言われている。「われわれが主観を捨象するなら、抽象的なものとして純粋な物体が残る。しかし物理的な物体ではなく、石のような具体的な物体である。物理的に理念化され理論化されたものが残るためには、そこから石の具体化は捨象されなければな

らない」(XXIX, 158)。前述のように、われわれは、事物を価値とともに経験している。そこから価値を捨象すると、「石」や「植物」といった具体的な意味をもつ事物が残る。そこからさらに、そうした具体性を捨象することで、理念化は成立する。つまり数値に置き換えるのである。例えば、質量を表す代数記号が組み込まれている物理公式の場合、そこに代入される数値は、何の質量なのかは無関係である。「石」なのか「馬」なのか「星」なのか、問われない。公式からは、生活世界における事物の意味が、すべて捨象されているのである。

これと類似的に主観の忘却を考えた場合、どのようになるか。幾何学的空間と周囲世界を対比するとわかりやすいだろう。先ほど確認したように、この世界は、「私」を中心とする一人称的な世界である。例えば部屋の中にいる場合、「私」は、中から部屋を見ることになる。それも、部屋の全面を一度に見ることはできないので、「私」の位置と方向に対応した部屋の一面を見ることになる。こうした部屋の把握には、必ず「私」の位置がある。これに対して、この部屋を幾何学的に捉えた場合、この部屋は、「部屋」という具体的な意味を捨象され、「立方体」として把握される。そして、その中に「私」の位置はない。この立方体は俯瞰的に全面的に理解される。したがって、主観の忘却とは、一人称的な視点の忘却と言えよう。

ここで再度、フッサールの自然科学批判を考えたい。前章では、生活世界の忘却として、その要旨をまとめた。しかし、我々は、生活世界の忘却が同時に主観の忘却であることを確認した。彼は、自然科学が生活世界とそこに生きる主観を忘却していることを指摘し、その両者を主題としたかったのである。

自然科学との関わりの中で、生活世界は自然科学の主題であり、土台だった。そうであるなら、そこに生きる主観は、研究を行う主観つまり科学者であると言えるだろう。

本章では、『危機』書の議論から、科学と科学者を区別する観点を取り出した。それを図式的に表現すれば、「生活世界－理念化－科学者」となる。次章では、こうした観点から、生活世界における科学者の在り方について見ていく。

3. 「職業 (Beruf)」としての科学者

ここでは科学者を一つの「職業」と捉え、生活世界におけるあり方について考えたい。「職業」は「Beruf」の訳語である。フッサールは、「仕事」という一般的な意味ではなく、特別な意味をこの概念に与えている。「職業」概念が扱われるのは、『危機』書の第35節である。ここでは超越論的判断中止の分析論という大きな文脈の中で、判断中止の性格を説明する形で「職業」概念が導入されている。

「われわれは特別な意味で、学問、芸術、軍務などを『職業』と呼ぶが、普通の人として、われわれはたえず、(拡大された意味での)さまざまな『職業』(関心の態度)の中を同時に生きている。家長であると同時に、市民であるなど。これらの職業は、現実に働くそれぞれの時間を持っている」(VI, 139)。

ここでの「職業」は、「関心の態度」という意味で、「家長」や「市民」などを指している。この広義の「職業」は、学問などの特別な意味の職業も含むことができるだろう。これらも「関心

の態度」を持っているからである。したがって「学者」や「芸術家」「軍人」も指している。フッサールは、さらに「現象学者」「哲学者」も「職業」の中に組み込んでいる。これらの「職業」が持っている「それぞれの時間」とは、その「職業に就いている間」のことである。家長として務めている間は、市民や学者や軍人ではない。このような「職業」の側面を、フッサールは判断中止の性格とした。「われわれは、習慣的な関心の一つを現実化し、われわれの職業に就いている（業務を遂行している）間、われわれは、他の生活関心——たとえそれがわれわれに固有の永続的なものであったとしても——に関して、判断中止の姿勢をとる」（VI, 139）。

このような「職業」概念から考えれば、科学者も「科学者」という職業と同時に、他の職業の中を生きている。例えばアインシュタインは、「科学者」という職業に就くと同時に、「夫」という職業を生きることもあれば、「原爆の反対者」という職業を生きることもあっただろう。それぞれの職業に就いている間は、それぞれの時間の中を生き、他の職業に対して関心を向けていなかった。

ところでフッサールの「Beruf」は、「使命」という訳語があてられることもある。八重樫徹は、フッサールが『改造』論文⁶の倫理的な文脈の中で「Beruf」を「特定の価値タイプを追及する生き方、もしくはそこで追及される価値タイプ⁷」という意味で用いているというところから、「Beruf」を「使命」と訳している。

たしかに『危機』書の中でも、そのように訳すことができる箇所がある。「この課題のために、われわれが召命されていること（berufen）を知っている」「われわれは——どうしてそこから目を逸らせようか——われわれの哲学をすることにおいて、人類の公僕である。われわれが、人格の内に使命感（Berufenheit）を持つ哲学者としての真の存在に対して持っている全人格的な責任は、同時に人類の真の存在に対する責任を内包している」（VI,15）ここでフッサールは、「哲学者」（「現象学者」）という「使命（Beruf）」を背負っている。ここにおける「Beruf」は「職業」と訳すことができないだろう。

しかし、第35節における「Beruf」を「使命」と訳すこともまたできないだろう。そこで焦点があてられているのは、一人の人が持つ「職業」の複数性だからである。フッサールは、常に「現象学者」として生きていたわけではない。家族を前にすれば「家長」としての時間を過ごしたであろうし、ナチ政権が成立した30年代のドイツにいれば「ドイツ市民」として、あるいは「ユダヤ人」としての時間を過ごさざるを得なかっただろう。

では「Beruf」の「職業」と「使命」という二つの側面は、どのように関係するのか。この二つは決して矛盾するものではなく、両立するものである。八重樫も引用している箇所が、それを説明してくれる。「こうして、真の芸術家にとっては芸術が、真の学者（『哲学者』）にとっては学問が、『使命（Beruf）』である」（XXVII, 28）。つまり、複数ある「職業」の中で、特定のものが「使命」になるのである。フッサールにとっては「哲学者」（「現象学者」）が「使命」である。

⁶ 1923-24年に三回にわたって日本の月刊雑誌『改造』に掲載された論文と、2本の未発表論文を総称して、『改造』論文と呼ぶ。現在、フッサール全集第27巻に収録されている。

⁷ 八重樫徹「フッサールにおける『真の自我』——フライブルグ期倫理学の再構成——」『現象学年報』26, 142頁（日本現象学会, 2010）

アインシュタインにとっては「科学者」が「使命」だったのであろう。「使命」は、それを背負う者に対して相対的なものである。

ここまで「科学者」が「職業」もしくは「使命」であることを確認した。「職業」としての「科学者」論にはどのような意義があるのか。

まず科学的な業務は必ず中断されるということが挙げられる。アインシュタインにとって、「科学者」が「使命」であったとしても、彼はずっと科学的な業務に従事していたわけではない。彼がどんなに研究熱心であっても、研究は、必ず就寝によって中断する。他にも、食事や恋愛や旅行、原爆を巡ってアメリカ大統領に手紙を送るなど、アインシュタインはさまざまなことをしていた。彼は、科学的な業務を中断し、また再開するという仕方ですべて「科学者」を務めたのである。

次に、生活世界論と結びつくことで、科学的理論を科学者たちによる形成物とみなすことができるという点が挙げられる。「客観的科学の命題、理論、全体系は、共同作業によって結び付けられた学者たちの何らかの活動から得られた形成物であること。もっと正確に言えば、より以前の活動の成果が常にあとの活動成果の前提となるような、活動の継続的な構築からの形成物である」(VI, 134)。ここでの「共同作業」は、共同研究という共時的なものだけではない。マイケルソンの実験がアインシュタインの研究の前提になっていたり、本稿で引用した先行研究が本稿の前提になっていたりなど、通時的なものも含む。

最後に、科学的な理論をこのように捉えることで、学問を世代的なものとして捉えられることが挙げられる。「すべての学問は、生き生きとした学問のために能作する主観としての、有名であれ無名であれ、協力したり対立したりする研究者たちの開かれた世代の連鎖に関わる」(VI, 367)。本稿では詳しく論じることはできないが、フッサールは『幾何学の起源』という『危機』書第9節に関わる草稿の中で、このような科学観の下で、幾何学の歴史的な問題を論じている。

本節では「職業」としての科学者論について見てきた。最後に、以上のような意義がどのような可能性を持つのか、を考えたい。

おわりに 『危機』書の可能性

フッサールが『危機』書を発表した1930年代は、前世紀末に啓蒙主義から生じた自然科学を第一とする考えが、第一次世界大戦によってゆらぐことはあっても、まだ残っていた。高度な技術によってより生活を豊かにしようとすることや、論理実証主義による「統一科学」運動が、そのことを示しているだろう。

科学の生み出したものが引き起こす事態（例えば、地球環境問題）の深刻さを知っている現代では、「自然科学は世界を数学的なものとして捉え、われわれの生活世界を忘れていた」というフッサールの批判は、半ば当然のこととされるかもしれない。

また30年代は両大戦の間に位置する時代で、このころに、まさに科学と社会が深くつながろうとしていた。前世紀までは個人の好奇心によって進められてきた科学研究が、国家政策や企業経営と深く結びつき、巨大なものへと成長している過程だった。そのため科学と社会の関係を考えようとする者が現れるようになった。1931年に、ソ連の物理学者 B. M. ゲッセンが、「ニュー

トンの『プリンキピア』の社会的経済的起源」という論文を発表している。また科学社会学という分野を拓いた R. K. マートンが「17世紀イギリスにおける科学・技術・社会」という論文を、1938年に博士論文として科学史研究雑誌『オサイリス』に発表している。

科学史の分野では、このように科学を社会との関係において考えることを「エクスターナル・アプローチ (external approach)」と言う。成定薫によれば、このエクスターナル・アプローチが盛り上がったのは、30年代と70年代である⁸。70年代の盛り上がりは、1962年と70年に公刊された T. S. クーンの『科学革命の構造』に由来する。すでにマートンが科学者集団についての研究を行っていたが、クーンのパラダイム論が科学における科学者集団の重要性を示唆したと言われている。

科学と科学者の区別の重要性がさほど注目されていなかった30年代に公刊された『危機』書は、現代では注目に値しないと思われるかもしれない。

本稿では、そのことを否定するために『危機』書には、科学と科学者を区別する観点があることを論証した。では、この観点にはどのような可能性があるだろうか。

科学と科学者の区別が重視されるようになると、科学者集団から科学や科学的知識を考察する研究が登場するようになる。B. ラトゥールや S. ウールガーの『ラボラトリー・ライフ——科学的事実の構成——』や D. ブルアのストロング・プログラムなど、科学知識は社会的に構成されると主張する研究である。しかし、このような研究は、科学知識の相対性を強く押し出すことで、科学者の反感を買い、「サイエンスウォーズ」という事態に陥ってしまった。

フッサールの自然科学論も、科学理論を科学者たちによる形成物とみなす点で、こうした主張と類似する。しかし、フッサールは科学理論の普遍性も同時に認めている。「幾何学がそのすべての真理と共に、あらゆる人、あらゆる時代、あらゆる民族、単に歴史的に事実上存在する民族だけではなく、考えられるすべての民族にとって、無条件な普遍性において妥当することは、一般的な確信である」(VI, 385)。彼は、一方で自然科学の基盤として生活世界を提示し、科学的理論が科学者たちによる形成物であると主張し、他方で科学理論そのものが持つ普遍性を認めている。これは矛盾ではない。自然科学の普遍性を認めたくえて、なぜそのような学問が可能なのか、それを問題としているのである。

単に科学知識の普遍性を絶対視するのではなく、また単に科学知識の社会的相対性を強く押し出すのではなく、そうした両義性を認め、その相関関係を考察しようとするフッサールの『危機』書は、科学の普遍性を主張する第一の道や、科学の相対性を主張する第二の道ではない、第三の道を模索することができるものではないだろうか。

(やまぐちこうたろう 臨床哲学・博士後期課程)

⁸ 成定薫「科学史における三十年代と七十年代 エクスターナル・アプローチの展開」(村上陽一郎編『知の革命史 I 科学史の哲学』1980, 所収)

Husserls Wissenschaftslehre
—Die Neubewertung der *Krisis*-Abhandlung—
Kotaro YAMAGUCHI

Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie ist Husserls letzte große Arbeit. Der Zweck dieses Aufsatzes besteht darin, die *Krisis*-Abhandlung erneut zu bewerten.

In der gegenwärtigen Wissenschaftslehre wird der Unterschied zwischen der Wissenschaft und dem Wissenschaftler für wichtig gehalten. Durch die Findung dieses Unterschieds in *der Krisis* zeigen wir deutlich, daß die *Krisis* nicht bloß eine klassische Arbeit, sondern auch gegenwärtig sinnvoll ist.

Deshalb entwickeln wir diese Diskussion mit folgender Prozedur.

Im ersten Teil fassen wir Husserls Kritik über die Naturwissenschaft zusammen. Das zentrale Thema bezieht sich auf die Begriffe von „Idealisierung“ und „Lebenswelt“. Es lässt sich feststellen, daß die Naturwissenschaft die Natur idealisiert und die Lebenswelt vergisst.

Im zweiten Teil finden wir den Unterschied zwischen der Wissenschaft und dem Wissenschaftler anhand des Begriffs „Umwelt“ und des Wiener -Vortrags, auf dem die *Krisis* aufbaut.

Im dritten Teil fassen wir die Lehre vom Wissenschaftler. Dieser erfasst hier sich als Beruf. Die Bedeutung, die der Wissenschaftler als Beruf hat, lässt sich erörtern.

Im letzten Teil bestätigen wir die Wichtigkeit dieses Unterschieds historisch und wägen eine Möglichkeit der *Krisis* gründlich ab und schließlich bewerten sie von neuem.

〔キーワード〕

理念化、生活世界、科学者、職業